

鳥

(20171014-20180331)

大村伸一

私が鳥であることを知るものは少ない。ごく親しい三人の友人と、古くから世話になっているあの先生だけが知っている。それ以外にも私が鳥であることを知る者はいるのかもしれないが、私に面と向かってそう言うものはいない。鳥であるということは、彼らにとって恥ずかしいことであったり、愚かなことであったり、隠さなければならないことであったりするのは間違いないだろう。だが、私は鳥なのでそのような感情とは無縁である。

鳥であるならば一日のうち大半の時間を空中で過ごしそうなものだが、私にはそのような習慣はない。幼い頃から自分が空を飛べるのだと知らなかったわけではないし、飛ぶのが苦手だとか、あまつさえ高い場所が怖いというわけでもなかった。言うなれば、空を飛ぶ機会がなかっただけということだろう。空を飛ばなくてもたいの用には足りたし、空を飛ばうと考えるたび、空ではどのような服を着ればいいのかいつも長い時間悩まざるを得ず、そのようなことに時間を費やせば結局そのときどきの用事に間に合わなくなるのである。服については、結局、どんな服も空を飛ぶには適さないという結論に達している。かといって全裸で空を飛ぶわけにもいかないだろう。そんなことをすれば私を知らない人々にとって、ますます鳥であるということが恥ずかしいことであり、愚かなことであり、隠さなければならないことであると証明するようなものだ。ずいぶん後になって、鳥が全身を羽毛で覆い隠しているのは、まさにそういう理由なのだようやく気がついた。

前にも書いたように、私は生まれつき鳥だったわけではない。そのような生まれつき鳥であるような人間がいたらお目にかかりたいものだとも思う。そもそもそれはもはや人間ではなく単に鳥と呼ぶべき存在ではないだろうか。そのような人間がいたとすれば、彼の人は鳥の姿をしているが実は人間であったという事になるのだろう。とはいえ、そもそも人間と鳥の定義に従えば、鳥でありかつ人間であるなどということはすでに矛盾したものでしかない。乏しい私の生物学の知識によれば、生物には遺伝子というものがあって、人間と鳥は遺伝子が異なるので、同時に人間でありかつ鳥であるということはあるまいのである。とはいえ、鳥と人間の区別など儂いものなのかもしれない。どちらでもよいのかもしれない。どちらかにしようとする事自体、それは人間の習慣であり、鳥である私はそのような観念に縛られる必要などないだろう。とにかくにも、私は生まれつき鳥だったわけではない。生まれつき鳥であるような人間には知り合いもいない。

今から考えると母方の祖父もまた鳥だったのではないかと思わないこともない。唯一残されている祖父の肖像画はまさに絶滅した鳥の姿であり、その黒い嘴や白い部分のない眼球はいつも夜の暗闇に向かって開かれているかのようだ。鳥であることについて、祖父に尋ねることができていれば、私の生きていく上でいろいろと有益な知識を得られたであろうが、祖父は私がまだ物心のつく前に他界したため、何一つ教訓を引き継ぐことはできなかった。だから、祖父が生まれつき鳥だったのか、あるいは後天的に鳥となったのかを知る由もない。もしも祖父が鳥であったのなら、彼の子孫である私の血縁の中に他にも鳥がいそうなものだが、そのような類縁の存在を私は知らない。もしもいたとしても、彼らは自らの素性を世間には秘密にしているということもあるだろう。そうであれば、血の繋がりがあっても、わざわざ私にそれを知らせようとする理由はない。

鳥であることの不都合を感じたことはない。あるいは感じたことがあるのかもしれないが、今となっては覚えていない。鳥とはそういう生き物なのだろう。と、ここまで考えてひとつ思い出したことがある。それはつまり、鳥である私の性器は極めて小さいということだ。鳥としては受精に必要な最小限度の大きさなのだと思うが、その大きさを直に他の同性と比較する機会はなかったので具体的にどの程度小さいのかは説明できない。ただ、これまで体を交えたどの女性からも十分な満足を引き出すことができたことなどないので、そういう理由なのだろうと思っている。そもそも卵生である鳥に、性的な快楽は必要ではなく、空を飛ぶのに不必要に大きな性器は邪魔になるだけなのだから、これは自然の摂理というものだろう。あるいは、卵生であるということは柔らかい石としか見えない卵に向かって欲情し射精しなくてはならないのだから、そのために必要な快楽は哺乳類とは比較にならないほど強くなければならず、故にその快楽を引き起こす性器が大きければ大きいだけ、快楽を受けたときその衝撃は大きなものになり、おそらくそれによって精神に異常をきたさざるを得ないということはあるかもしれない。だから、正気でありつづけるために性器が小さくなっているということも考えられる。鳥とはまったく似たところのない卵に性欲を感じるなど、鳥はすでに気が触れてしまっ

ているのだと言われれば、それは容易に信じられる話だ。勿論、性欲は人間に固有の動機であり、鳥には性欲などないのかもしれない。私にはよくわからない。

私は鳥として生まれたが、物心がついた頃ようやく自分が鳥であることを自覚するようになった。それまでは自分が人間であるのか、あるいは生物であるのか、などという事柄には一切興味もなかったし、お前は鳥か人間かと問われても、その間の意味さえ理解できなかっただろう。卵の殻を破って外に出る以前の記憶はある。殻の内側は暖かく、安寧ではあったが、生まれる少し前には、次第に乾いていく殻の内側にいつまでもいられないと感じていた。外が次第に明るくなるにつれて、次第に大きくなる外の音がひどく怖かったことも覚えている。誕生より以前の記憶がそのようなものだから、私は産まれながらにして鳥だったのだろう。

私の叔父は、親類からはでまかせばかり話す信用のおけないやつだと評されていたが、私には嘘をついたことはなかった。そんな叔父が、一度、胎児の頃の思い出を話してくれたことがある。その話によれば、誕生が近づいても外がとりたてて賑やかになることも、ましてや明るさを増すなどということもなかったそうだ。そのような闇の中で永遠に生き続けるのかと思うと、そのまま死んでしまいたくなかったものだと彼は言っていた。生まれて後にその意見が変わったのかどうかは聞いていない。叔父はその話を二度とすることはなかった。忘れてしまったのかもしれない。だとすれば叔父は人間だったように思うが、鳥であることを隠すためにそのような思い出話をでっちあげたのかもしれない。そうではないという理由は思いつかない。

鏡の中の私は人間となんらかわらない。鏡に自身を映したとき、それは人間としか見えないということだ。つまり、私は鳥であるとしても、まだ鳥とはいえないというだけのことなのかもしれない。そうであったとしても、いずれ鳥になることはわかっている。口の端がよく乾くようになってきたこととか、目尻に固まる目脂の松脂のようなにおいで毎朝目がさめるとか、羽毛ぶとんに触れると何か不愉快なおいがして気分が悪くなるとか、そのような予兆が増えてくるにつれて、いずれ私が鳥になるだろうことは確信となってきている。しかし、私がやがて鳥になるであろうことを知る者は少ない。少数の友人にも話していないし、古くから世話になってきた先生にも打ち明けてはいない。少ないというよりも、誰も知らないのだと思う。そもそも、私自身人間として生まれ育ち、あとわずかの寿命を数えるようになって、ようやく自分が鳥になるのだということを理解したのだから、他の誰も私の正体を知る機会などなかっただろう。それにそもそも、自分以外の誰かが鳥になるかどうかなどということを誰が知りたいと思うだろうか。人間がそのようなことに興味を抱くはずのないことは、私にはよくわかっている。

生涯の最後に鳥である私はどのようにして死んでいくのか。その間であればいくらかの興味はある。自らの死に興味を抱くなど、鳥とはいえないまるで人間そのものではないかとも思うが、人間として生きていた時間が長かったのだから、いたしかたのないことだろう。一度、先生に死に方について尋ねたことがある。そのときの話によれば、人間は歳をとるにつれすこずつ肉を失って骨だけの存在に変わり、最後は霧のように消えていくのだという。それはまちがいでなく若い時分に水分の摂取が足りなかったからだともおっしゃっていた。勿論、そのような死を迎える生き物がいるという話は他に聞いたことがないのだが、先生が嘘をつくものだろうか。では鳥がどのように死んでいくのかと尋ねると、それについては先生は何も教えてくれなかった。たとえ先生といえども鳥の死に方まで知っているわけではないということだ。あるいは、鳥の死に方について、私には教えるべきではないと判断されたのかもしれない。とすれば、先生は私が鳥である、あるいはいずれ鳥になるということをご存知だったのだろう。

(おわり)